

翻刻 「畿内巡り歌日記」

大阪府立中之島図書館	大阪資料・古典籍課	大北智子
	ビジネス支援課	高萩綾子
	企画情報課	山田瑞穂
大阪府立中央図書館	第二閲覧課	小笠原弘之
	人文系資料室	佐藤敏江

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵(二二三・六/一四六)一冊(二六・五×十九・五cm)台簽の書名「大和めぐり 吉野 高野山 和哥の浦 和泉路から大坂と八幡 京都迄」表・裏表紙各一、本文十六丁、更に、「松葉氏女 松雪集 右(破損) 廻行 (破損) 嘉永迄」と書かれた台簽が貼付され、その裏には十二支の一覧のメモ書きのある表紙が付されている。文政七年(一八二四) 足代(権太夫) 弘訓写

「松葉氏女 松雪集」とあるのは、伊勢度会氏の一族である商家松葉小兵衛の娘、松葉いぬ(法号松雪、延宝四年〜元禄三年、)と、その著作物「松雪和歌集(大日本歌書綜覧等による)」をさすと思われる。

足代弘訓(号寛居)は天明四年(一七八四)生まれ、伊勢の度会氏の一族で伊勢外宮の権禰宜、荒木田久老、後芝山持豊、本居大平、本居春庭に学び、本居学派の中心的存在でもあった、

本書は、書者が足代権太夫弘訓である事、本書と共に綴じられていたと思われる「松雪集」が一族である松葉いぬの著作である事等から、伊勢山田の度会一族の先人(安永頃)の作品を、後代の足代弘訓が書き写したものと思われる。

凡例

本文は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して返り点、句読点を施した。旧漢字は新字体に改めた。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヾ」は底本のままで表記した。

〔畿内めぐり歌日記〕

弘訓先生

大和めぐり 吉野 高野山 和哥の浦 和泉路から大坂右八幡 京都迄

安永きのと未のとし四月二日、山田原を立出て宮川を打渡る時人々にわかれ行。名残つきせされは、しばらく流を手にむすひて内外の神垣をふし拝む程に、夜もやう／＼明わたりぬ。夫より急きて、午ノ刻とおぼしき時松坂を過、大和の道におもむけは、卯月のはしめにて春のおもかけまだ残る野山のけしき面白く過行程に、日もやう／＼かたふき侍れば、田尻といふ所に泊り侍る。此宿りより見渡せば、未に山かさなりて、見なれし古郷の朝熊山もこひしければ

朝熊の高根も遠く成まゝに見なれぬ山のちかくなりぬる

三日 田尻の宿を立出て急行は、阿保山といふ山有。峯のあらし谷の水音すさましく思ひて過ゆけは、道の程三里といへともすゑとをく覚ゆ。此山に杉の林有、其中に石地藏まします。此地蔵は弘法大師の御作のよし、其里の者に聞てふし拝み行は、むかふ高根の青葉の中に一木の遅桜さかりなるを見て

心してあらしな吹そ山桜あとよりこゆる人もあるらし

かくなん口すさみて急ぐ程に、伊賀伊勢の境有。是よりすゑは伊賀の国になんなり侍ると人の言ければ

急つゝ伊勢路もよそに分過て猶遠さかる古郷の空

折ふし雨降たれば、くらき木の下道を行程に阿保といふ宿につきて泊り侍る。

四日 阿保を立て行程に、此道に山川多く岩こす浪のをと岸の松風いと面白く、旅のうさをしばしわすれて急ぐ程に、初瀬の山にさしかゝれば、正木のかつら永き日もくるゝ比に成ぬ、やう／＼山を越て初瀬の町を見おろせば、立ならひたる家／＼のけしきたぐひなく、わすれかたかりき。頓て初瀬の町に着しかは、折ふし観音開帳と聞てもふで侍るに、入相の鐘しつかにひゝきていとかしこくぞ覚へ侍る。其夜初瀬の町に宿りしかは、山おろしはけしく吹て夢もむすはさりき。

五日 朝又々観世音にもふでゝ和歌一首奉納し侍る。

尋来てあふくもけふを初瀬寺聞しより猶いともかしこき

夫より三輪の明神にもふて侍るに、木立ものふりて神さびたるけしきとふとく覚て拝みめくれは、瑞垣ちかき辺に根は壺ツ、末は式つにわかれたる杉有。されど壺本はたふれ壺本は其まゝ也。所の人に尋ければ、是なんふたもとの杉成よし聞て

三輪の山神のめくみは杉の葉のみとりつきせぬいくよろつとし

あたりの茶店にしはらくやすらひ、在原寺にいたる。此寺は在五中將の旧跡成よし、堂のうしろにむかしの井筒の水とて苔むしたる井あり。

むかし思ふ井筒の水はそれなからむすひし人の面影もなし

此寺にて様／＼宝物を拝み、夫より帯解寺の地藏にもふて、其ほとりの茶店にしはらくやすらへは、是より程ちかき寺に開帳あるよし言ければ、則もふて侍るにいと賑はしき事なりき。かくて日もく

れかゝる比奈良につきて、先元興寺にもふて待るに、堂など焼失のよし、塔のみぞ見えし。はや日もくれたれば、春日の宮にも参候て奈良の町に泊る。

六日 朝春日宮にもふて待るに、古郷に見なれぬ鹿のむらかりあるか(一)そ、秋はいかならんと覺ゆ。所々拌みめぐりて若宮八幡宮にいたる。此所の山は②菅家のぬさも取あへず手向山とよまれし手向山なりと聞侍れと、さしたる言の葉もなければ神に手向をもせざりき。夫より過行程に三笠山のふもとにいたる。聞しよりもうるはしき山なれば春秋のながめいかならんとゆかしく思ひぬ。

旅衣つゆにもぬれぬ三笠山さして祈し神の恵に

折ふし高根にさす朝日を見るにも、秋の月影見まほしく思ひて過行程に大仏にいたる。夫より二月堂、興福寺にいたる。此興福寺はいにしへ大伽藍の地なれども、焼し後其おもかげもなきよし聞て、かゝる寺のかわりはてしは、飛鳥川の洲瀬にはかぎりざりけりと覺ゆ。夫より猿沢の池にいたる。③わきもこるぬくたれかみを猿沢のとよみし哥を思ひ出られて、あたりの茶店にしはらくやすらはは、其辺にむかしの八重桜なりとて垣ゆひまわしたる一木の桜有。

八重桜にほひも嘸といにしへの都の春そこひしき

此ほとりに様々名所旧跡ありと聞しかと、未遠き旅なれば尋ゆかて法花寺、西大寺、招提寺、薬師寺などにもふて、過行程に、菅原といふ村有。其所に天神の社有。此所はかの菅原の伏見の里になん侍ると聞て

すがはらや伏見の里にかりねしてしはし結はん古郷の夢

日も西にかたふきたれば、郡山といふ所に泊る。

七日 郡山のさきに小いづみといふ所有、其所に庚申の開帳ありと聞てもふて、夫より法隆寺、龍田の宮にいたる。此龍田宮はいにしへの龍田ノ宮にあらず。是より壱里計山にむかしの宮の跡わつかにましますよし聞侍れと、程遠ければはるかに拌みて片岡山の達磨寺にいたる。かの飢人の

④いかるかや富の小川のたえはこそと返歌せし所とふし拌み、夫より中将姫蓮の糸染給ひし所とて染寺という寺有。染井水、糸掛桜などを見て当磨寺にいたる。僧に案内を頼て、所々ふるき跡を拌みめぐり、夫より程ちかきこせとなんいふ所に泊る。

八日 こせを立て壺坂、南法花寺にもふて待るに、此比打つゝき空晴たれば、日影あつく覺て、山のぼれはしげる木陰に蟬の声ひゞくにも、古郷はいかならんと思ひて急ぐ程に、頓て本堂にいたりぬ。此寺にて法の声とふとく聞えて、かゝる天気よろしき折しももふて待るは、いかなる契りにやととふとく拌みて

をのつから涙こぼるゝ夏衣心すゝしき法の御声に

夫より橋寺にいたる。こゝはいにしへ九重の地成よし、右近橋左近の桜有。其外さま々旧跡を見るにもいとゝむかしこひしく思ひ侍る。夫より土佐となんいふ所にやすらひ、程ちかき龍蓋寺にもふて、夫より多武峯にのぼる。此山の麓に石つみかさねし塚有。里の者にとへは、推古天皇の陵成

よしいふ。此辺に崇峻天皇の陵有よし聞侍るか是にてや有らん、おぼつかなし。やうく多武峯にのほりて見れば、いづれもさいしきにして、其うるわしき事筆にもつくしかたし。かなたこなた拜み廻りて寺内を出れば、はや日も西にかたふきぬ。夫より七八町過て冬野といへる所に泊る。此所山の高根なれば夜半のあらしはげしくて夢もむすはさりき。

⑤九日 冬野より山をくだるに朝日影さしのぼりて、高取の城にうつろふけしき面白く、又谷を見れば山吹きかりにて、此けしきいわんかたなし。夫より吉野にいたる。吉野山をのほりて見れども花は散はて、青葉のみ也。此花を見まほしく思ひしに、其比にもあわさりけるか(こ)そ、いと本意なき事に思ひて、かの新古今集に ⑥ちる花のわすれかたみの峯の雲そをたに残せ春の山風といふ哥思ひ出られて

麓まで青葉に成りぬよしの山花の形見の雲も残らて

夫より蔵王権現にもふて、吉水院にもふて侍るに、折ふし大峯へ参詣の人多ければ、人々大峯へものぼらんといふにつけて、いまた未ノ刻ながら吉野のしるべの方に泊り、此宿のあるし伴て竹林院にもふてさまく宝物を拝み侍る。、此宿のうしろの方に如意輪寺といふわづかの庵あるよしあるじに聞にも、むかし後醍醐天皇と聞ゆるみかど世のみだれに此如意輪寺にてむなしく成給ひよし聞侍るか、陵も此辺に有らんと思ひて袖ぬるはかりなりき。此宿の辺の谷を見渡して

かの ⑦よし野の里にふれる白雪といふ哥思ひ出られて、此山々の雪の詠いかならんといとうらやましくそ覚ゆ。

十日 横雲棚引比より吉野の宿を出て、先鷲尾大明神にもふて侍るに、其辺に古き鐘あり。そこを過て金精大明神といふ社有。此社を拝みて蹴抜の塔にいたり、夫より安禪寺の奥ノ院にいたる。

此所よりちかき山の麓に苔清水とて西行の旧跡有よし聞侍れと、大峯の未遠ければ尋もせて山にさしかれば、聞しよりさがしき事限なし。花はあれとこ、かしの谷の桜今さかりなれば、前大僧正行尊の ⑧諸ともに哀と思へ山桜とよまれしは、かゝる所にやと打詠ゆけは、猶く道けわしく雲ふかし、所々にやすらひ、やうく雲をしのぎて本堂にいたれば、岩の上に聊なれとまた雲残るを見るに、いと深き山と覚ゆ。本堂のほとりの寺にやすらひ、夫より山をくたれば日も西にかたふきぬ。此大峯に坐窟、三重瀧などいふ所あれと、其所いつくといふ事を知らず。たくれの比洞川ドロといふ所に下りてこゝに泊る。

十一日 洞川に龍泉寺といふ寺有。此寺にもふて、吉野の宿りにいたりてはらくやすらひ、夫より一ノ蔵王堂ノ前を過て吉野山をくたり、六田ムツといふ里にいたる。此所に川有、六田の淀といへるは此所にや。川を越て過行は岩多き川有。面白きけしきなればはらくやすらひ、流を手をむすひて過行は、鵜野となんいふ里有。はや日もくれたればこゝになん泊り侍る、

十二日 鵜野を立て行はいみしき家居有。里の名をとへは五條となんいふよし、そこを過て三軒茶屋といへる所にてはらくやすらひ、未ノ刻とおぼしき時高野山のふもと紙谷にいたる。高野山を

見れば、夏木立の折ふしにけふは時々雨そゞきたれば、木々の葉のみどり猶ふかし。今やほとゞぎすの初音を聞つらんと思へど、一声もなければ急て高野山にさしかゝる。はじめにのぼる坂を不動坂といふよし、則不動堂あり。此坂をこゆれば雨も少しやみてのぼりやすければ、程なく峯にいたりぬ。五明院といへる寺に立よる事あれば、此寺に泊り侍るに、入相の鐘こゝかしこにきこへければ、

ゆふくれは哀もそひて高野山嶺のあらしに鐘ひゞく也

十三日 夜あけ侍れば弘法大師の御廟所にもふて侍るに、道の程聞しよりも遠し、様々靈仏を拝みて宿りし寺にいとまをこひ、夫より花坂に下りて旧跡を見、夫より天野といふ所にくだりて天野宮に参り、夫より又山にのほれば吉野川のなかれ見えて、此ながめよろし。山をくたりて過行はいみじき寺有。里の人にとへは龍利寺といへる寺成よし、こゝを過て慈尊院といへる寺にいたる。こゝは弘法大師の母公の御影ましますよし、堂のうしろにはきみの御廟あり。又堂のむかひに七社大明神といへる社もまします。いづれも拝みて其ほとりの家に宿り侍る。

十四日 是より和歌の浦へ程近しときけは、此慈尊院より河船に打乗和歌山さしてゆけは、此比の山路にかわりて川のけしき面白く、心もはれて打ながめゆけは左の市に面白き山有。此船のうちに和歌山の人も乗侍れば尋しに船岡山といふよし、此所左右に山ありて中を船よく過行侍るに、下り船なれば水にしたがひて其行事はやし。此船のうちに輕舟已二過ク万重ノ山と詩をなん吟する人有。まことにかゝる所をやいふ成へし。又左のかたにいと面白き家居有。人に尋侍れば紀伊の国主につかふる人の別業成といふ、内ぞゆかしく思ひて過行は岩出といへる所に船をこぎよせて、こゝにしはらくやすらひ給へと船人いふ。此岩出といへる所にて皆々食事なとして又船に打乗ゆけは、未ノ刻とおぼしき時和歌山につきぬ。いみじき家居ならびたればはや都につきたる心地して、こゝを打過頓て和歌の浦にいたりぬれど、早日もくれたれば、玉津嶋には翌日こそもふてんとて和歌の浦の町に宿る。

十五日 朝和歌の浦権現にもふて、其辺を見るに、芦の村立に驚なと立たるにも、あしへをさしてたつ啼わたるとよみしは此あたりの事を言つらんと覚ゆ。夫より西のかたを見れば海の面はれて沖の嶋山帆をあけし船なともみえたり。予敷嶋の道にあそひぬれど此和歌ノ浦には今はしめてぞもふて侍る。

言の葉に聞し木陰を尋来て今立なる、和歌の浦雲

夫より玉津嶋にもふて侍るに、瑞垣なと神さひたるけしき也。予とし比此玉津嶋にもふてん事を望侍るに、ことしはしめて思ワすもこゝにいたりぬるをとふとく覚て、露はかりの手向をなんし侍る

国の風たえせぬ御世はいくとせも立帰り見んワかのうら浪

こゝを過ていもせの明神にいたる。此道のほとりの山、又海の面のけしきたくひなし。

此所より紀見井寺への渡し船あり。打乗て紀三井寺にもふて、和歌の浦を見おろせ、浜辺に塩屋のけふり見えて、難波わたりの春のけしきならねと、心あらん人に見せばやと思ひ侍りき。夫より山口といふ所にしはらくやすらひて信達といふ所に宿り侍るに、折しも十五夜の月すみのぼりたれば皆く庭ちかく出てねもやらず、あたりさやかなる月なればかくなん。

うき旅の心もはれて草枕むすふもおしき夜はの月影

十六日 信達を出てかいづかといふ所へ行道に木ふかき宮あり。蟻通ノ明神成よし聞てもふて侍るに、むかし貫之此所に而 あま雲の立かさなれる夜半なれはとよみしには引かへて空もくもりぬ。朝日影にあけの玉垣いとふとく覚ゆ。

神垣の恵すくなるみしめなわななき旅路のうきを祈らん

かいづかにてやすらひ、急きゆけは程なく境の町にいたる。妙国寺といふ寺によのつねにかわりたる蘇鉄ありと聞て是を見、又其辺の家に⑨面白き松あるよし聞て立寄、夫より住吉にもふて侍るに、木立神さひて岸の松風浪の音いつれも殊勝なりき。此神も敷嶋の道を守給ふときけはとふとく思ひて

住吉のきしの姫松とことハに守つきせぬ敷嶋の道

日もくれ侍れば急き行に、頓て大坂につきぬ。しはらくとゞまりてこゝかしこを見んと、其夜しるべの家を尋て大坂になんとゞまり侍る。

十七日 先故郷への文なとしたゝめて後、天王寺にもふて侍るに、五重塔すくれていみしく見えたり。あたりなる亀井の水にて

幾よろつ汲とも尽し名にしあふ亀井の水のはてしなけれは

こゝを過て一心寺よりこゝかしこの開帳にもふてゝ、さまくの宝物を拝て生玉明神にいたれば、はや日もかたふきたれば宿に帰る。

十八日 きのふにかわりて空かきくもり雨しきりに降けるゆへ、いづくをも見すしていたつらに日をくらし侍る。

十九日 猶く空晴やらされは、けふもいたつらに日をくらし侍る。

廿日 十九日に同じ。

廿一日 けふしもまた空晴やらされとも、いつまていたつらに日を送るへきやはとて、御城の辺より天満宮、南本願寺などいへる所少し見廻りて宿に帰り侍る

廿二日 いまた空晴やらされとも、いつか晴るとも知れかたければ、大坂の宿りを立出なから、伏見の川船も此比の大水にて出されは陸を行侍るに、道のあしき事甚し。

やうく日のくれかたに橋本といへる所につきて宿る。されとも雨晴やらす。是より外に旅のうきはあらしと思ふにも、故郷のかた恋しくなりぬ。

けふもまた雨にしほれし旅衣かたしく夜半をいかにあかさん

廿三日 橋本を出て男山八幡宮にもふて、夫より山をくたり、伏見の 稻荷社にいたりて稻荷の瀧も見まほしけれと、其所を知らされはむなしく過て東福寺にいたり、夫より大仏三十三間堂などにもふて、日もかたふきたれば、しるべの家を尋てしはらく都にとまりぬ。

廿四日 因幡堂より誓願寺にいたりて夫より清水寺にもふて待るに、南都興福寺の開帳此所にてあれはわきて賑ふ事甚し。是より東山の方残りなく拝み待るに、いつれも心の残らぬ所はなし。南禅寺、真如堂、黒谷などはわきて殊勝に覚ゆ。

廿五日 仏光寺より東西の本願寺にいたり、夫より東寺にもふて、北野のかたにいたり待るに、けふは天満宮の御縁日とて参詣の人甚し。天満宮にもふて待るにいとふとく思ひて

かしこしな北野の道の末遠く神の恵のかきりなければ

夫より平野社にいたる。神さひたる木立にて、瑞垣などの朽たるを見るにも、むかしはいみしき社になん待るとききは、かゝる社の末を思ひて、伏見の里ならねとあれましくおしく覚ゆ。こゝを過て金閣寺にいたり、夫より等持院のあたりを見廻りて、日もかたふきぬれば宿りに帰る。

廿六日 雨しけく降けれども、嵯峨の方ゆかしければ、梅宮より松尾社にもふて、過りに川あり。いかなる川そと尋侍れば大井川と答ふ。経信の哥に ちりかゝる紅葉なかれぬ大井河いつれ井せきの水のしからみとあれは、秋のけしきゆかしく思ひて過ゆけは、野々宮にいたる。さびたる黒木の鳥居、こしば垣、むかしのしるしはかりなるは、いとあはれにむかしこひしく成ぬ。こゝを過て天龍寺より清涼寺にいたりて、其ほとりにてしはらくやすらひ、二尊院にいたる。此うしろの山は小倉山なるよし、定家の山荘の跡ありと聞て立寄見れば、露しげき夏木立の中にむかしの山荘のしるしはかりなる庵あり。此所より見れば都の外迄見おろし、又あらし山も程ちかくしてそのけしきよろしければ、むかしの家居いかならんとなつかしく思ひて

小倉山むかしをしのふ我袖のなみに木々の露もまさらし

此ほとりに妓王寺といへる尼寺あり。是はむかし妓王、妓女、仏御前と聞えきし人々の、世をのがれてこゝに住給ふ所成よし。さびたるけしきいとあはれに覚ゆ。こゝを過て愛宕山にのほる道の程けわしく思ひ侍れと、やう／＼のぼりて日のくれかた清瀧といふ所にくだりぬ。此清瀧といへる所に宿り待るに、うしろに清瀧川ながれて岸の山たかし。しげる木々の葉のみどり水にうつろひてきよく、岩にせかるゝ水の音たぐひなく思はれて

手にむすぶ影も濁らて名にしあふ清瀧川の瀬々の白波

殊に此宿りのあるじの女情ある人にて、誰々も此宿りを立出んかたもなきこゝちぞせし。

廿七日 清瀧の宿りを立出て廣沢の池にいたる。廣沢の池の鴛とりとは聞しかと、似たる鳥も見えず。池のほとりにしはらくやすらひ、仁和寺より妙心寺、大徳寺にいたり、こゝを過て加茂ノ社にもふて待るに、五月ちかき比なれともかみ山のほとゝきす一声もなし。此社も神さひたるけしきいと殊勝なりき。是よりしゝか谷、法然院にもふてんといふ人あれば、又東山の方におもむき法然院にいたるに、しつかにひゝく鉦のをとのみして人音まれなれば、をのつから心すみて、世をのがれ住へきはかゝる所にこそと思ひ侍る。

廿八日 故郷へ送る物あればいとまなふして、六角堂へもふでしはかりにて日はくれ。

廿九日 宇治の方も見まほしけれと、故郷の方に急ぐ事あれば、都の宿りを立出て先香堂の辺より貴布称の明神にもふて待るに、物さびたる瑞垣などふとくそ見えし。

きふね川幾世にこらて行水のふかき恵を聞も頼もし

山を越て鞍馬山にいたる。先僧正谷にいたりて見るに社有。いかなる神そとへは、大天狗ノ宮と答ふ。此所に牛若丸のかくれ石、学問石、月侍石といふ石有。奥之院不動堂にいたりてしはらくやすらひ、夫より本堂にいたる道に、牛若丸せくらべ石といふ石あり。扱本堂にいたればはや日もかたふきぬ。是より比叡山へ程遠しときけは、宝物など拝みて鞍馬山の麓の町に宿り侍るに、此宿の前に高き山見えたり。翌日なん此山をこゆると聞て、かの家隆の 明はまたこゆへき山の峯なれや空行月の末のしら雲とよまれし言の葉は、かゝる所の事にてやあるらんとぞ覚ゆ。

月日のめくる事夢のことくにして、早五月朔日に成ぬ。けふも空晴たれば比叡山にのほらんと、朝またきに宿りを立出て行に、高き山ならびたり。此山道けわしく暗ふして、谷水道に流れたれば、のぼりかたくくだりかたし。やうゝ越はてゝやせの村にしはらくやすらひ、夫より比叡山にのぼる。やうゝにのぼりて寺あり。黒谷青龍寺といふ、いと殊勝に見えたれば、こゝにもふてゝ過行に、伝教大師の廟あり。こゝを過て根本中堂の方をさしてのほるに、折ふし村雨降来り。又もや空のけしきかわるらんと思ふ比ほとゝきす啼わたりぬ。さつきなれとも旅立しより今をはしめなれば

待わひし山ほとゝきす一声にぬれてかひある村雨のそら

大講堂より根本中堂にいたりて山をすこしくたれば、鳩の海ちかく見えて、辛崎の辺より船こぎ出すけしき面白し。此坂をくたりて山王権現にもふて、辛崎の松も見まほしければ、立寄て木陰にしはらくやすらふに、酒などを売者あれば求て各ゝゑひを

すゝめ侍る。

さゝ波の汀の風もなつの日に木陰すゝしき志賀の浦雲

かくなん口すさみてやすらふ程に、三井寺への便船ありと聞て打乗大津にいたるに、折ふし三井寺の観音開帳なれば、もふて膳所にしはらくやすらひ、瀬田の宿に泊る。

二日 瀬田の宿を出て草津に而しはらくやすらひ、土山の宿に泊る。

三日 土山の宿を立て鈴鹿川を越て鈴鹿の関にさしかゝれば、此比雨すさましく降しと覺て谷の水音高し。峯にのほれはやうく雲はれて

五月雨の降り鈴鹿の峯はれて木ふかく見ゆる伊勢の神垣

越はてゝ関の宿にいたれば、雨しきりに降来りて旅衣ほす隙もなし。此関の宿にむかし蝦夷人桜を枝にし来て、此所にさし侍りければ根つきぬ。是をゑぞさくらといふよし、関ノ地藏堂のうしろ西の方にありと或書に見えたれば、尋侍るに桜の木はあれともむかしの桜は枯たるにや、古き桜の木は見えざりき。こゝを過て関川をわたれば、はや故郷に帰りたるこゝちして急ぐ程に、津の町につきぬ。日もくれかゝる比なればこゝになん宿り侍る。

四日 空はまだ曇たれとも津の宿りを立出ぬ。三日の夜雨しきりに降りしかは、雲津川の水多くして渡し船もなしと聞しかと、河の辺までいたるに渡し船ありときゝて其嬉しさかぎりなし。此河をやうく渡りて松坂の辺にてしばらくやすらひ、夕ぐれの比宮川につきぬ。水多く見えたれともさはりなく渡りたるそうれしき。此旅路に誰々もさはりなく帰り侍るは偏に内外の神の恵ととふとく思ひて

榊葉のみとりかはらぬ世々かけて恵もふかき伊勢の神垣

文政七年仲夏

足代権太夫弘訓

注記

① 表紙裏に貼紙

十千 十二枝 同異名付 以下略

甲 闊アツ逢ハウ 乙 □ セン蒙モウ 丙 柔ジウ兆テウ 丁 強キ □ アウイ 戊 著チヨ雍ヤウ 巳 屠ド維イ

庚 上ジャウ敦トン 辛 重ヂウ光カウ 壬 玄ケン □ ヨリ 癸 昭セウ陽ドウ 子 困敦コントン夜半九ツ事

丑 赤 □ 若セキフンシヤク 寅 撰提格セツテイカク平且七ツ 卯 単関日出六ツ 辰 執徐シツチヨ

巳 大荒落クワウラク 禺 中四ツ 午 敦 □ ソンヤウ 未 協映ケンソウ日映八ツ 申 □ □ クンダン

□ 時七ツ 酉 作 □ サクカイ日入六ツ 戌 エンボウ 黄昏五ツ 亥 天 □ 献 エンケン 人定四ツ

○ 高遠白衣に成て病気は何とかわたらせ給ふと念比に尋られし時そしりたる人々道をはかくこそとふへき儀なれと又かんじあへりと云々

- ② このたびは幣もととりあへず手向山もみじの錦神のまにまに／菅原道真「古今和歌集 羈旅」 小倉百人一首
- ③ わきもこかぬくたれかみを猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき／柿本人麻呂「拾遺和歌集 哀傷」 『大和物語』に關係の話あり。
- ④ いかるかや富の小川のたえばこそわが大君の御名をわすれめ／拾遺和歌集 哀傷「日本靈異記 上」「和漢朗詠集 卷下 雜 親王」 上宮聖徳法王帝説 片岡岡説話
- ⑤ 付箋あり

反古の内二

千本桜弥助すし珍ら敷御送り請ふて千本桜すしの風味はよしの山名にそ昔しの花そ残らん名も高き風味よし野々弥助鮎花のお里か残る名物

- ⑥ ちる花のわすれがたみの峯の雲そをだに残せ春の山風／藤原雅経「新古今和歌集 春」
- ⑦ あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪 坂上是則「古今和歌集 冬」 小倉百人一首
- ⑧ もろともに哀れと思へ山桜花より外に知る人もなし／前大僧正行尊「金葉集 雜上」 小倉百人一首
- ⑨ 住吉名物 難波やの松（傘松）をさすか

⑩ 若の浦に潮満ち来れば瀉をなみ岸部をさして鶴鳴き渡る／山部赤人「万葉集 卷六」

⑪ 雨雲の立ち重なる夜半なればありとほしとも思ふべきかは 紀貫之

⑫ ちりかかる紅葉なかれぬ大井河いつれ井せきの水のしからみ／大納言経信「新古今和歌集 冬」

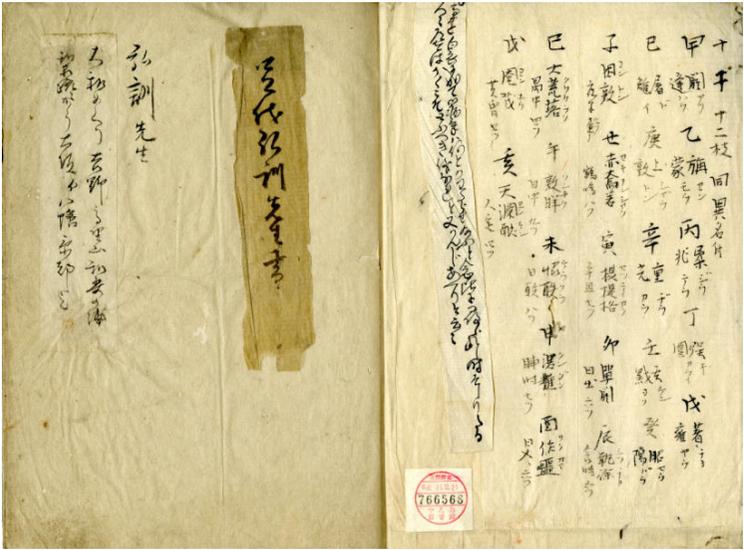
⑬ 廣沢の池の鴛とり

⑭ 明ばまたこゆべき山の峯なれや空行月の末のしら雲／藤原家隆「新古今和歌集 羈旅」

おわりに

大阪府立図書館では中之島図書館が古典籍を所蔵している事もあり、長年にわたり様々なかたちで休み時間等を利用して職員有志間で近世の資料に親しみ、所蔵資料への理解を深めるために勉強会を実施している。今回は勉強会の成果を公表することで、勉強の励みになると共に、広く図書館の所蔵資料を紹介する機会になればと思いい有志で翻刻に臨んだ。

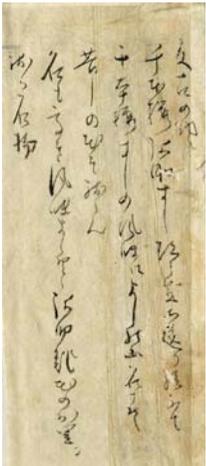
今後とも様々な機会を捕えて府立図書館の資料が紹介されることを期待したい。



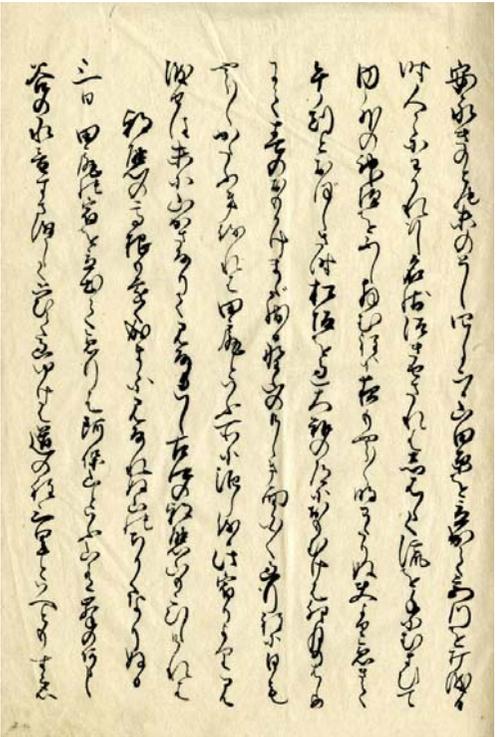
①



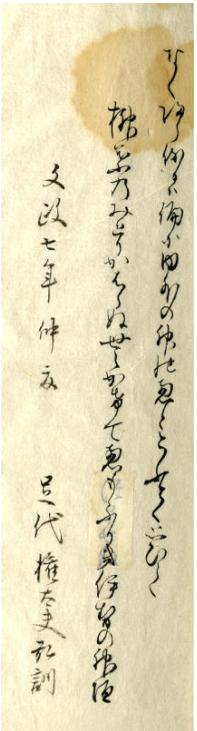
②



③



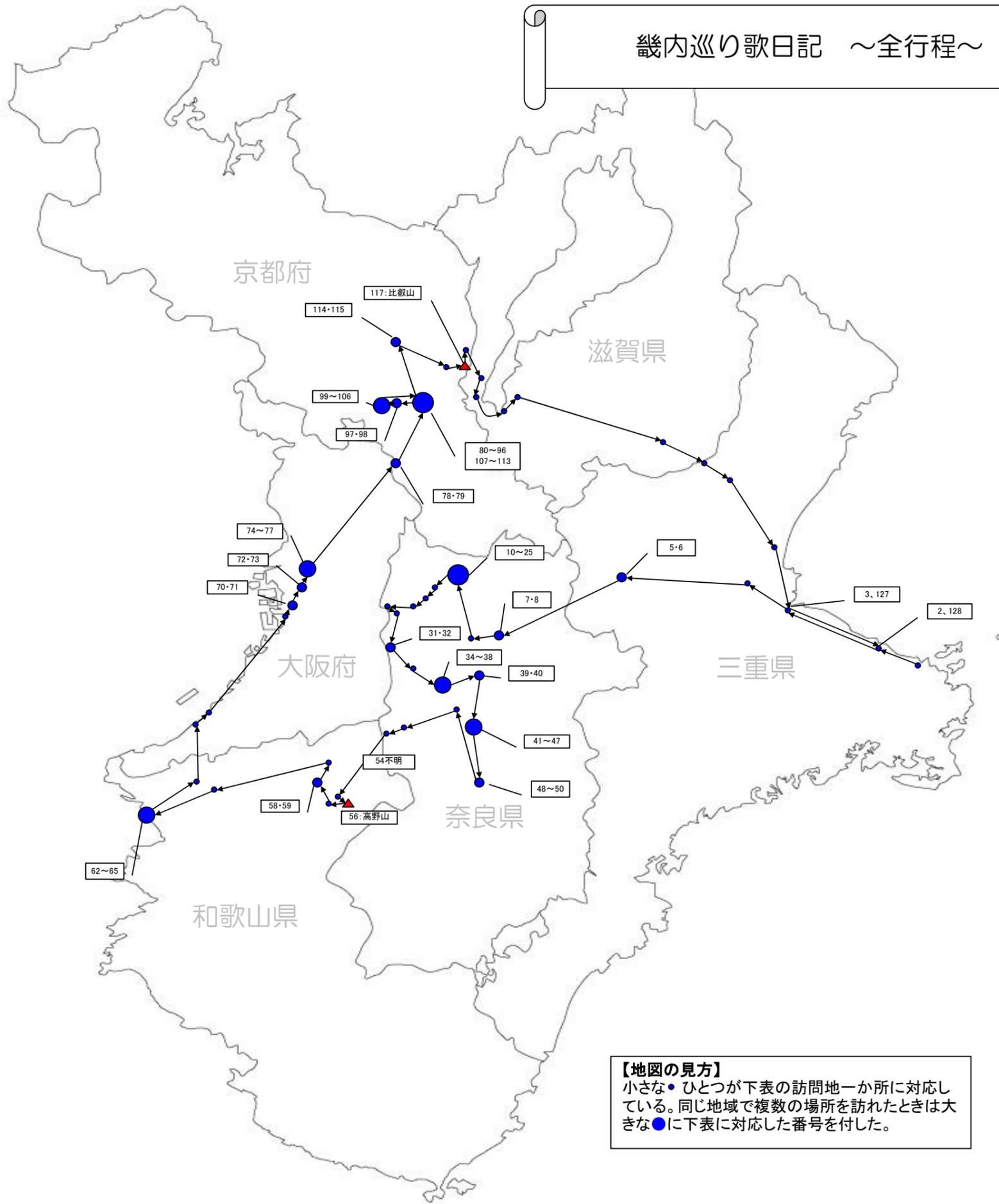
④



⑤

- 【図版】
- ① 外表紙裏／内表紙台簽
 - ② 外表紙台簽
 - ③ 付箋（注⑤）
 - ④ 本文
 - ⑤ 末尾

畿内巡り歌日記 ～全行程～



【地図の見方】
 小さな●ひとつが下表の訪問地一か所に対応している。同じ地域で複数の場所を訪れたときは大きな●に下表に対応した番号を付した。

【表の見方】左から訪れた日にち、番号、訪問地をあらわす。文政七年(1824)出発。

4/2	1	山田原	4/6	21	猿沢池	4/9	41	吉野山	4/14	61	岩出	4/23	81	東福寺	4/26	101	清涼寺	5/1	121	瀬田	
	2	宮川		22	法花寺		42	蔵王権現		62	和歌の浦権現		82	大仏		102	二尊院		5/2	122	草津
	3	松坂		23	招提寺		43	吉水院		63	玉津島		83	三十三間堂		103	小倉山			123	土山
	4	田尻		24	薬師寺		44	竹林院		64	妹背明神		84	因幡堂		104	妓王寺		5/3	124	鈴鹿の関
4/3	5	阿呆山	25	菅原寺	45	鷲尾大明神	65	紀三井寺	85	誓願寺	105	清滝	125	関							
	6	阿呆	26	郡山	46	金精大明神	66	山口	86	清水寺	106	広沢の池	126	津							
4/4	7	初瀬山	4/7	27	小泉庚申	4/10	47	安禅寺	4/15	67	信達	4/24	87	南禅寺	4/27	107	仁和寺	5/4	127	松坂	
	8	初瀬		28	法隆寺		48	大峯		68	貝塚・蟻通明神		88	真如堂		108	妙心寺		128	宮川	
4/5	9	三輪明神		29	龍田宮		49	洞川		69	堺・妙国寺		89	黒谷		109	大徳寺				
	10	在原寺		30	達磨寺		50	龍泉寺		70	難波屋の笠松		90	仏光寺		110	加茂社				
	11	帯解寺	31	染寺	51	六田	71	住吉	91	本願寺	111	法然院									
4/6	12	元興寺	32	当麻寺	52	鶴野	72	天王寺	92	東寺	112	六角堂	4/28	112	六角堂						
	13	春日宮	33	御所	53	五條	73	一心寺	93	北野天満宮	113	香堂		4/29	113	香堂					
	14	奈良	34	壺坂寺	54	三軒茶屋	74	生玉明神	94	平野社	114	貴船			5/1	114	貴船				
	15	春日宮	35	南法花寺	55	紙谷	75	大阪城	95	金閣寺	115	鞍馬山		115		鞍馬山					
4/6	16	若宮八幡宮	4/8	36	橘寺	4/12	56	五明院(高野山)	4/21	76	天満宮	4/25	96	等持院	4/26	116	八瀬村				
	17	三笠山		37	土佐		57	花坂		77	南本願寺		97	梅宮		117	比叡山				
	18	大仏		38	龍蓋寺		58	天野		78	橋本		98	松尾社		118	黒谷青龍寺				
	19	二月堂		39	他武峯		59	天野宮		79	男山八幡宮		99	野々宮		119	山王権現・辛崎				
	20	興福寺		40	冬野		60	慈尊院		80	伏見稻荷		100	天竜寺		120	三井寺				